Osaka University Knowledge Archive

Title	「まで」の表現機能に関する一考察
Author(s)	伊藤, 智博
Citation	日本語・日本文化. 1997, 23, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6340
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

＜研究論文＞

「まで」の表現機能に関する一考察

伊藤智博

0．はじめに

「まで」に、移動の終わる場所や事態の終わる時を表わすいわゆる、到達点、限界点などと言われる格助詞としての用法と、話し手の意外性を表わす取り立て助詞としての用法があることは、広く知られていることである。

（1）金沢から北陸本線で富山まで行き、そこで高山線に乗り替えて美濃太田へ、……　（宗介）

（2）店を閉める八時まで酒をのまさないと母がいいはったのである。　（君を）

（3）待たせたな。そろそろうちのかあちゃんの顔、見せてやっからな。おっ、校長先生まで来てんのかよ。　（宗介）

（4）名前はともかく住所まで瑛子が教えるとは思えなかった。　（君を）

（1）（2）は格助詞の用法で、（3）は話し手の妻を披露する集まりに「校長先生が来ている」ことに対する話し手の意外性を表わし、（4）は「瑛子が（話し手の）住所を教えた」ことに対する意外性を表わす取り立て助詞の用法である。統語的には、（1）（2）の「まで」が、限界点ないし到達点を表わす格として機能しているのに対して、（3）（4）ではそれぞれ「校長先生が」「住所を」というガ格、ヲ格に「まで」が付加され、何らかの意味－現実の事態に対して話し手が意外と感じていること－を与える機能として作用している点で異なっている[1)]。しかしながら、（1）～（4）のように「まで」が名詞に直接付く場合、外形からは格助詞の用法か取り立て助詞の用法か区別がつかない。

本稿では、「まで」のこれら格助詞としての用法と取り立て助詞としての用法にどのような共通点、関連があり、二用法がつながっているのかということを、

「現実の事態に対する話し手の意外性」という観点を手がかりに考察し、明らかにしたいと思う。

1．限界点、到達点の「まで」

「まで」が移動の終わる場所や事態の終わる時、つまり限界点、到達点を表わす格として機能することは周知のとおりであるが、ここで今一度概観しておきたい。

（1）金沢から北陸本線で富山まで行き、そこで高山線に乗り替えて美濃太田へ、……　（宗介）

（2）店を閉める八時まで酒をのまさないと母がいいはったのである。　（君を）

（1）は「(北陸本線で）行く」という移動が「富山」で終わることを、（2）は「酒を飲まない」という事態が「(店を閉める）八時」で終わることを表わしている。これらは、動作や事態の終了場所や時点を単に述べ立てているにすぎず、それ以外の意味やニュアンスを得ることはできない。

（5）考えてもみなせてえ。田乃内家といえば新潟まで聞えてる大家らすけ、それなりに世間さまへの体面もごぜましょう。　（蔵）

（6）夜の二時まで会社にいた。

（5）（6）はそれぞれ「(田乃内家の名前、評判が）新潟に聞えている」こと、「夜の二時に会社にいた」ことを表わしている。さらにこれらの文はこうした文そのものの意味以外の意味やニュアンスを読み取ることもでき得る。次のように「新潟」「二時」に情報を付加した場合、このことは顕著である。

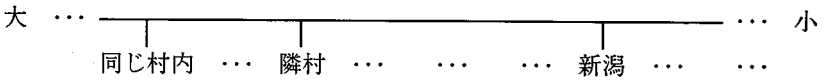
（5）'……田乃内家といえば、ここから遠くの、そしてここよりもはるかに都会の新潟まで聞えている大家だから……

（6）'仕事が忙しくて、朝九時から、誰もいなくなった夜の二時まで会社にいた。

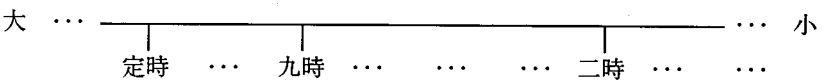
（5）（6）のそれぞれの話し手が、「新潟」「夜の二時」に対して（5）'（6）'で示した情報を持っている場合、文を単に述べ立てた到達点、限界点の意味に加えて話し手が心理的に「遠い場所」「遅い時間」とそれぞれ感じているという

意味、ニュアンスを認めることができる。つまり（5）では「小さな村にある田乃内家だから、村内や隣村にその名前、評判が聞える可能性はあっても、遠くの大きな街である新潟にそれが聞える可能性は少ないだろう」と話し手が認識していた、ということが読み取れる。同様に（6）は「いつもの時間に仕事が終わったり多少遅くなる可能性はあっても、夜の二時に会社にいる可能性は少ないだろう」と話し手が認識していたことを読み取ることができる。このことを図示すると次のようになる。

（7）田乃内家の名前、評判が聞えている可能性



（8）仕事が終わる時間の可能性



以上のことから、（5）（6）は（9）（10）のような意味解釈ができる。

（5）考えてもみなせてえ。田乃内家といえば新潟まで聞えてる大家らすけ、それなりに世間さまへの体面もごぜましょう。　（蔵）

（9）a．田乃内家の名前、評判が新潟に聞えている。

b．田乃内家の名前、評判が村内や隣村にも聞えている。

c．aの可能性がbの可能性より小さいと話し手は認識している。

（6）夜の二時まで会社にいた。

（10）a．夜の二時に会社にいる。

b．定時、午後九時にも会社にいる。

c．aの可能性はbの可能性より小さいと話し手は認識している。

（9a）（10a）が到達点、限界点を表わした格助詞としての用法の意味解釈、つまり単に文を述べ立てたものの意味にすぎないのに対して、（9b,c）（10b,c）は、話し手が「新潟」「二時」をどのように認識しているかによって生じる意味、ニ

ュアンスである。（1）（2）の用法と比べると、「まで」に前接する名詞が、場所、時を表わしている点で共通しているにもかかわらず、（5）（6）にはさらに（9b,c）（10b,c）で示した意味、ニュアンスが加わる。次の（11）も移動の終わる場所を表わしているが、「わざわざ」「なんて」という語によって到達点、限界点以外の意味を読み取ることができる。

（11）それに紺も紺だ。こんないたずらをしにわざわざ病院まで来るなんて。（きら）

（12）a．紺が病院に来ている。

b．（話し手の職場である）病院以外の場所、家にも来ている。

c．aの可能性はbの可能性より小さいと話し手は認識している。

（5）（6）（11）のように、話し手が「まで」でマークする場所、時が、ほかの場所、時よりも実現の可能性の小さいものと認識している文においては、話し手のその認識のあり方と、現実世界の間にズレが生じていることがわかる。しかもこのズレは、話し手の認識の中で可能性の小さいものが現実世界で生起していることから、ーつまり話し手の前提と現実世界のあり方がズレていることからー話し手が意外と認識するズレ方である。なぜ話し手がこのズレ方に意外性を感じるかは、「まで」に前接する名詞（ここでは、「新潟」「病院」といった場所、「二時」といった時）を話し手がどのように認識しているかによる。話し手が、何を実現可能性の小さいものと認識しているかということに他ならないのである。

また、話し手が、何を実現可能性の小さいものと認識するかということは、話し手個人に依存する主観的なものの場合もあれば、社会通念に依存する客観的なものの場合もある。社会通念に依存するもの（例えば（5）（6））であれば、聞き手もその意外性に対して容易に共感することができる。しかしながら、話し手個人に依存するもの（例えば（11））であれば、何らかの情報を得ないかぎり、聞き手は話し手の意外性に共感することができない。ここで確認しておきたいことは、どんな場合に、社会通念に依存したもの、あるいは話し手個人に依存したものが実現可能性の小さいものとなり得るのかということではなく、聞き手が話し手の意外性を読み取るためには、社会通念であれ話し手の個人的

認識であれ、聞き手にとっては何らかの情報、背景知識が必要、ということである。このような情報、背景知識が明示できる（5）（6）（11）は（1）（2）と同様に限界点、到達点を表わす場所、時に「まで」が後接しているとはいえ、格としての機能のみでなく、話し手の意外性をも意味する機能を持っているとみなすことができる。

2．話し手の意外性を表わす「まで」

「まで」が場所、時を表わす名詞に後接して、限界点、到達点を表わす格としての機能を備えながら、それに加えて話し手の意外性を表わす機能も備えている場合があることをここまで観てきた。ここでは、話し手の意外性を表わす機能のみを備えている「まで」について考察する。

（13）「みんな、オレの顔を立てると思って重蔵を迎えてやってくれ」と、座長は土下座<u>まで</u>してみせたのです……　（宗介）

（14）大きいと男生徒も女扱いしないし、先生<u>まで</u>フォークダンスで男役に回れなんて言ったり。　（君を）

（14）遊園地というのは不思議なところだ。来たくもなかった人間<u>まで</u>、つい軽率に遊んでしまう。　（きら）

（13）～（15）は次の（16）～（18）の意味をそれぞれ表わしている、と解釈することができる。

（16）a．座長が土下座をしてみせた。
　　b．土下座以外の頼み方、言葉で頼む、手を合わせて頼むこともしてみせる。
　　c．aの可能性はbの可能性より小さいと話し手は認識している。

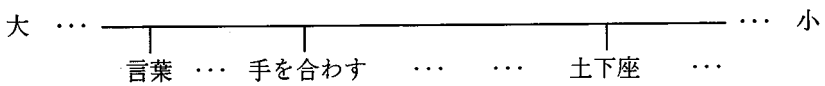
（17）a．先生が男役に回れと言った。
　　b．女友達、男生徒も男役に回れと言う。
　　c．aの可能性はbの可能性より小さいと話し手は認識している。

（18）a．遊園地に来たくなかった人が遊んでしまう。
　　b．遊園地に来たかった人、どちらでもなかった人も遊んでしまう。
　　c．aの可能性はbの可能性より小さいと話し手は認識している。

(16a)（17a）（18a）はそれぞれ、単に文を述べ立てた意味しかもたない。それぞれの（b,c）は、話し手の認識のあり方によって生じる意味である。(16）～（18）より（13）～（15）は「まで」が到達点、限界点といった格を表わさずに、話し手の意外性を表わしていることがわかる[2)]。(13）では、「座長の頼み方は、言葉で頼む、手を合わせて頼むことよりも、土下座して頼む可能性の方が小さい」と話し手が認識していたのにも関わらず、現実世界では「可能性の小さい土下座して頼む」が生起したため、話し手の中でズレが生じ意外性を表わしている、と解釈できる。この意外性は、話し手が現実世界での実現可能性の小さいものとして認識していたメンバーが、現実世界で生起することによって引き起こる。同様に（14）（15）では、それぞれ「先生」「遊園地に来たくなかった人」が話し手の認識と現実世界でズレており、しかも話し手の認識の中で実現可能性が小さい「先生」「遊園地に来たくなかった人」が、現実世界で生起することによって、その結果話し手の意外性を表わしている。先にも述べたが、この話し手の認識のあり方は、話し手個人に依存している場合もあれば、社会通念に依存している場合もある。

（13）～（18）で興味深いことは、(16b）（17b）（18b）が現実世界で真か偽か（13）（14）（15）ではわからないことである。逆にいえば、現実世界において(16b）（17b）（18b）は偽でも、(16a）（17a）（18a）は真として成立するということである。これは、例えば（13）の話し手は次の（19）が現実世界で成立することを仮定して、「土下座する」を認識しているからである。

（19）座長の頼み方の可能性



ここで重要なことは、「まで」でマークするメンバー以外（言葉で頼む、手を合わせて頼む、など）があくまでも仮定されたものということではなく、たとえ仮定されたものであっても、現実世界で存在するものと、話し手が認識している点である。話し手が「まで」でマークするメンバー以外のメンバーが存在しない、あるいは想定しにくい文や状況の場合、「まで」を用いるとやや座りの

悪い文となる。

(20) ？あの時は意識不明の状態だったので、自分では水まで飲めなかった。

(21) あの時は意識不明の状態だったので、自分では水さえ飲めなかった。

(20) と (21) を比べた場合、相対的に「さえ」を用いた (21) の方が自然な文として受けとめやすい。なぜ (20) に座りの悪さを感じるのか、それは「自分では飲めなかった」ものとして「水」以外に想定できないからに他ならない。理論的には「飲めなかったもの」という「飲み物」には「水」の他に「ジュースやコーヒー、ビール」などが含まれるので、「水」以外のものも想定できるのであるが、意識不明の状態の時、実際関係するのは「水」であり「ジュースやコーヒー、ビール」などが問題にならない－つまり「飲めるか否か」ということが問われない－ことを我々は自己の経験から知っているのである。よって、現実世界で理論的には「ジュースやコーヒー」など他のものの存在を想定できても、現実世界が「意識不明の状態の時」は意味を為さないから (20) にある種の悪さを感じるのである。

(22) あの時は意識不明の状態だったので、自分では水を飲むことまでできなかった。

(23) あの時は意識不明の状態だったので、自分では水を飲むことさえできなかった。

(22) (23) のように「自分ではできなかった」ものとして「水を飲むこと」の他に「ご飯を食べること」「何か言うこと」などが現実世界において想定できる、換言すれば問題になる状況、文にすれば「まで」を用いた文も許容度が上がる。このことは何を意味しているのであろうか。他のメンバーの存在の必要不可欠という現象は、「～から～まで」の「まで」が到達点、限界点を表わすためには「～から」にあたる起点、出発点が必要であり、またその経過点、通過点とでもいうべきものの存在があることに起因していると考えられる。「まで」が到達点、限界点を表わすという格助詞としての用法は、場所や時を表わす名詞に「まで」が後接した時に顕著であることを既に述べたが、(13) ～ (15)、(20) (22) における「まで」がもはや格助詞としての機能を持していないことは (13) (20) においてそれぞれ「土下座をしてみせた」「水を飲めなかった」

というヲ格が意味的には現われ、(14)（15）（22）においてそれぞれ「先生が言った」「来たくもなかった人間が遊んでしまう」「水を飲むことができなかった」というガ格が意味的に現われることからもわかる。しかしながら格助詞としての機能を持していないながらも、他のメンバーの存在を必要とする点から考えると、「まで」本来の機能の一部を持しているとも言える。つまり到達点、限界点を表わすという格表示の機能はもはや果たしていないが、他のメンバーの存在が必要不可欠という条件は持しているのである。ここに「まで」の格助詞としての用法と話し手の意外性を表わすという取り立て助詞としての用法の連続性を見出だすことができる。

このような「まで」の連続性を認めた上で、上に示したように「さえ」と置き換え可能な現象について最後に概観したいと思う。

3.「まで」と「さえ」

「さえ」もこれまで観てきた「まで」と同様、話し手の意外性を表わす機能を備えていることは、坂原（1986）、寺村（1991）、山中（1991a,b）、中西（1995）中野（1997）など諸氏によって研究されている[3)]。実際、「まで」を「さえ」に置き換えて文を作ってみても、さほどニュアンスを違えずに用いることができる。

(24)「みんな、オレの顔を立てると思って重蔵を迎えてやってくれ」と、座長は土下座<u>まで</u>してみせたのです……　（宗介）＝（13）

(24)'「みんな、オレの顔を立てると思って重蔵を迎えてやってくれ」と、座長は土下座<u>さえ</u>してみせたのです……

(25) 大きいと男生徒も女扱いしないし、先生<u>まで</u>フォークダンスで男役に回れなんて言ったり。　（君を）＝（14）

(25)'大きいと男生徒も女扱いしないし、先生<u>さえ</u>フォークダンスで男役に回れなんて言ったり。

(26) 遊園地というのは不思議なところだ。来たくもなかった人間<u>まで</u>、つい軽率に遊んでしまう。　（きら）＝（15）

(26)'遊園地というのは不思議なところだ。来たくもなかった人間<u>さえ</u>、つ

い軽率に遊んでしまう。

上例（24）～（26）' はそれぞれのペアで、意味の差異がない。しかし、先にも示したように、ある状況では「まで」および「さえ」を用いた文に意味の差異が顕著になる。

（20）？あの時は意識不明の状態だったので、自分では水まで飲めなかった。

（21）あの時は意識不明の状態だったので、自分では水さえ飲めなかった。

（27）考えてみれば弟以外にノックまでする人間はいないかもしれなかった。（君を）

（28）＃考えてみれば弟以外にノックさえする人間はいないかもしれなかった。

話し手の意外性を表わす「まで」は、「まで」でマークされるメンバー以外のメンバーが、たとえ仮定であっても現実世界で存在すると話し手が認識していなければならなかった。ゆえに、「水」以外の「自分では飲めなかったもの」が現実世界であり得ない（20）はやや座りの悪い文となるのである。一方（27）は弟の行動の可能性として、「ノックする」以外に、「チャイムを鳴らす、名前を呼ぶ」など、その存在が現実世界で可能なため用いることができる。

これに対して「さえ」にはこのような、話し手が「さえ」でマークするメンバー以外のメンバーの存在は現実世界で問題にならないことが知られている[4)]。よって、「水」以外現実世界で「自分では飲めなかったもの」が存在しなくても、（21）で「さえ」を用いることができ、その他のメンバーとの関係が問題になる（28）では「必要最低限ノックする」ということを表わす別の表現となる。

（29）？私の目からは一滴の涙まで出なかったのでございます。

（30）　私の目からは一滴の涙さえ出なかったのでございます。　（宗介）

（31）＃彼女までいれば、僕は幸せだ。

（32）　彼女さえいれば、僕は幸せだ。

現実世界での他のメンバーの存在が問題にならない「さえ」は（30）（32）のように、「最低限」の意味を表わすことができる。一方、現実世界での他のメンバーの存在が不可欠な「まで」を用いた（29）（30）はそれぞれ、「涙以外の他のもの」「彼女以外のほかの人」の存在があってこそ、文として成立する。先に

も述べたが、他のメンバーの存在の必要不可欠という現象は、「～から～まで」の「まで」が到達点、限界点を表わすためには「～から」にあたる起点、出発点が必要であり、またその経過点、通過点とでもいうべきものが存在することからもわかる。つまり格助詞としての「まで」と、取り立て助詞としての「まで」をつなぐものの一つとして、現実世界での他のメンバーの存在の有無があり、いま一つ、話し手の認識のあり方と現実世界のあり方の間にズレが存在することを挙げることができる。

4．おわりに

本稿では、移動の終わる場所や事態の終わる時を表わす格助詞としての「まで」が、話し手の意外性を表わす取り立て助詞としての「まで」と関連があり、連続的であることを示した。場所や時を表わす名詞に「まで」が後接した場合は、限界点、到達点を表わす格助詞としての意味に解釈することができた。さらに話し手個人に依存したものであれ、社会通念に依存したものであれその名詞に話し手の認識が関与している場合で、その認識のあり方と現実世界でのあり方の間にズレが生じた時、話し手の意外性を表わすことができた。これは、「まで」が到達点、限界点といった格を表わすことなく、話し手の意外性のみ表わす取り立て助詞としての用法につながる。

また、現実世界でのメンバーの存在の有無から、「まで」と「さえ」の用法について概観した。今後は、同じく話し手の意外性を表わす「さえ」「も」との共通、差異を考慮して、さらに発話行為をも含めた語用論の立場から「まで」についてさらなる考察が必要と考えている。

注

1）格助詞と取り立て助詞、とりたて詞の統語上の区別は沼田（1986）に詳しい。また、山田（1908）では、格助詞、副助詞、係助詞の別が記されている。近藤（1983）では、宮地（1952）を受け「まで」を準体機能と副機能の面から論考している。

2）ガ格、ヲ格などの格と取り立て助詞「まで」の承接については、寺村（1991）を参照していただきたい。

3）本稿はあくまでも「まで」をその対象としており、これらの論考と本稿との連関に

ついては、今後に期したい。

4）この点に関しては、坂原（1986）、山中（1991b）を参照していただきたい。

参考文献

近藤泰弘（1983）「副助詞の体系――現代日本語――」『日本女子大学紀要　文学部』32号

坂原　茂（1986）「“さえ”の語用論的考察」『金沢大学教養部論集人文科学篇』23巻2号

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

中西久実子（1995）「モとマデとサエ・スラ――意外性を表すとりたて助詞――」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版

中野亜美（1997）「『意外性』を表す取り立て助詞『も』『まで』『さえ』の一考察」神戸市外国語大学修士論文

沼田善子（1986）「とりたて詞」奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

宮地　裕（1952）「副助詞小攷」『国語国文』21巻8号

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

山中美恵子（1991a）「『も』の含意について その1――『対照集合』『EXPECT値』『内部対照集合』――」『日本語・日本文化』17号　大阪外国語大学留学生別科

――――（1991b）「『も』『でも』『さえ』の含意について」『日本語と中国語の対照研究』14号　日本語と中国語対照研究会編

例文を引用した資料

（きら）　江國香織『きらきらひかる』　新潮文庫

（宗介）　つかこうへい『寝盗られ宗介』　角川文庫

（蔵）　宮尾登美子『蔵（上・下）』　中央公論社

（君を）　山田太一『君を見上げて』　新潮文庫

【附記】

本稿を書くにあたって中畠孝幸氏、渡辺誠治氏に有益なコメントをいただいた。記して感謝したい。

＜キーワード＞　まで，到達点・限界点，意外性，他のメンバーの存在・想定

Notes on the Function of the Japanese Particle "made"

Tomohiro ITO

The purpose of this paper is to investigate the function of the Japanese particle "made" in the two usages,one of the usages is attached to expressions of time or place,the other is to expressins of speaker's unexpectedness.This paper aimes to describe clarity on the function of the Japanese particle "made" and the connection,the relation between the two usages.

It is demonstrated that when we consider the examination consideringspeaker's cognition and world knowledge in the presupposed condition and the actual conditon,this consideration connects two usages with speaker's unexpectedness.I suggest that this speaker's unexpectedness depends speaker's cognition and world knowledge.I also discuss the connection between the two usages "made".In short,these two usages are closely related to each other in the existence of another element as the speaker's cognition and world knowledge.